

国家に尽くした外交官ラファエッレ・グアリツリア(1)

——その生い立ち、人となり、史料を中心とした考察

楠 田 直 樹

はじめに

2002年の3月15、16日にカンパーニア州のサレルノ県庁で、「地中海におけるイタリアと南イタリアの役割」というタイトルで研究学会が開催されました。そのとき幸運にもサレルノ地方史協会 Societa' Salernitana di Storia Patria 会員としてその末席に参列させていただくという機会をえました。県知事自らが音頭を取り、そのテーマを熱く語る姿は好感が持てると共に、行政への活力を感じさせるものでした。また、登壇者各々の個性の輝きが見聞きできるものでありました。

そんな中、県知事の論旨の中によく登場してきたのが、このラファエッレ・グアリツリア Raffaele Guariglia という人物名であり、研究所名でした。彼は両世界大戦間のイタリアがその意向を表明するさいの立役者の一人であると見做されているほどの著名な人物です。この会議は、その人物の名をとってできたサレルノの学術研究所が主催した研究会でもありました。

こういう経過の中で、例えば一体どのような人物であったのか、またどんな卓越した外交手腕を駆使していたのか、バドリオ政権の中でどんな役割を担っていたのか、などという関心が醸成されてきたというのが偽らざるところです。ただわが国においては、その知名度はほとんどなく、関係性あるいは重要性も感じられないがために、ほとんど言及されることはなかったはずで

だから、その意味でも紹介を兼ねて、デアリッリアの生涯や業績を通して、彼の歴史の中での役割を見ていきたいという思いもあります。当然のことながら、彼の記録や文書類をどこまで駆使することができるのかが大きな課題です。ただ少なからず、外交史の分野に関心を向けている人にとっては、他愛のないことなのかもしれませんが、門外漢にとっては厄介なことの上ありません。ただどこまで肉薄できるのかは、これからの問題として捉えていくことで、その取っ掛かりになれば、と考えています。とりわけ、地方史の分野、特にサレルノやその地域を中心とした地方における人物史並びに政治史の解明への手がかりになることを願うのみです。その重要性については、今後の検証を待たなければなりません。

彼の業績を見るためには、まずDocumenti Diplomatici Italiani (DDI) の関係項目、そこには彼に関するものは雑多に存在していますが、とりわけ1919年3月24日から1922年10月30日の部分と1938年9月から1939年5月22日の部分が現在刊行されています。それに1920年代と1930年代初期のエチオピア問題に関する彼の役割が大切です。その他、大切なものだけ、ここに挙げておくとすれば、次のようなものがあります。

Mussolini il duce, II, Gli anni del consenso 1929-1936, Torino, 1974.

Lefebvre d'Ovidio, F., L'Intesa italo-francese del 1935 nella politica estera di Mussolini, Roma, 1984.

Ciano, G., Diario 1937-1943, a cura di Renzo De Felice, Milano, 1990.

Grandi, D., 25 luglio. Quarant'anni dopo, a cura di Renzo De Felice, Bologna, 1983.

Idem, Il mio Paese. Ricordi autobiografici, Bologna, 1985.

Pirelli, A., Taccuini 1922/1943, a cura di Donato Barbone, Bologna, 1984.

Alfieri, V., Due dittatori di fronte, Milano, 1949.

Bastianini, G., Uomini, cose, fatti: Memorie di un ambasciatore, Milano, 1959.

Castellano, G., Come firai l'armistizio di Cassibile, Milano, 1963.

Idem, *La Guerra continua*, Milano, 1963.

Von Hassell, U., *Die Hassell-Tagebücher 1938-1944. Aufzeichnungen vom Andern Deutschland*, Goldmann, 1991 [I.T. ridot.; *Diario segreto 1938-1944. L'opposizione tedesca a Hitler*, Roma, 1996].

Bonnet, G., *Fin d'une Europe*, Genève, 1950 [I.T.; *Fine di un'Europa*, Milano, 1951].

などが重要な文献として把握されています。そして彼が関係していた外交文書類が存在しています。以上のようなものを駆使して、若干調べてみたいと考えています。

いずれにしても、この論文を仕上げるにあたり、サレルノ地方史協会、特に当時協会書記長の重責にあったカルロ・サマリターニ Carlo Samaritani 氏、イタロ・ガッロ Italo Gallo 氏には多大な支援を受けたことを申し添えておきたいと思います。

1. 出生と幼少期、公職就任当時

彼の略歴を簡単に述べておくと、彼は、1889年2月19日ナポリの三方が海に囲まれた風光明媚なポジッリポ Posillipo の別荘で誕生し、1970年4月25日ローマで亡くなりました。弱冠20歳の頃に外務省に入省し、商務省局長を経て、1926年12月12日から1932年8月25日にかけて、ヨーロッパと東方との関係を保つ一人でした。そして大使として、マドリード、ブエノスアイレス、パリ、ローマ教皇庁、アンカラで重職を担い、イタリアにとって最も悲劇的な時期、つまりファシズムの崩壊から1943年9月8日の連合軍との停戦協定までのパドリオ政権下で外務大臣を歴任しました。

彼は実際にはナポリ育ちでしたが、家族はサレルノ県ライト Raito の出身でした。ただ、父親アルフォンソ Alfonso がナポリ大学商法学部教授をしていたために、ナポリで出生したということになっています。だが、実際にはアマルフィ海岸 *Costiera amalfitana* と非常に深い縁をもつ家系でした¹⁾。ただ単に眼前に存在していた地中海との関わりの強さはいざ知らず、その地でのオ

リーブやブドウを中心とする農耕生活や南イタリアの商船活動の中心を占めていたデ・チェーザレDe Cesare一族との交流が果たした役割は大きいものであったでしょう。叔父の一人エマニューエレ・ジャントゥルコEmanuele Gianturcoは、父親の姉妹の一人レミジアRemigiaと結婚しており、市民法などを教える大学教授で、高名な法学者であり、すでに文部大臣を歴任していました。1850年頃のヨットでの航海で重傷を負うまで、彼の家族は、研究に、国家奉仕に、と貢献しており、さらにはシチリアにあったニシエミ Niscemi の未開の封土の開墾に携わっていました。由緒ある家系で、すでにブランチフォルティBranciforti家の男爵の位を保ち、それは何年にもわたってお抱え弁護士をしていた大伯父チェレスティーノCelestinoからの埋め合わせでした。スペインにしろ、シチリアにしろ、王女マルゲリータ・ブランチフォルティMargherita Brancifortiの関心の的でした。ガエリッリアの祖父ミケーレMicheleは、1848年のナポリの自由主義運動に若くして参加し、まずブルボン朝の軍隊で、そして新設のイタリア陸軍で軍医として勤めていました。その後、ナポリに、彼の肝煎りでできた心霊房のおかげで、喘息治療専門の理学療法の研究所を立ち上げていました²⁾。ガエリッリアの祖母エリーザ・ピトキンElisa Pitkinは、ナポリに居住していたイギリス家系の出身でした。また、母親ジュリア・タイアーニGiulia Tajaniは、法学者、弁護士、国家公務員の家系の出身でした。彼女の母方の祖先の中には、ラクイラ L'Aquila やパレルモPalermo の控訴裁判所所長を務め、二度にわたって法務大臣を歴任したディエゴ・タイアーニDiego Tajaniがいました。そのうえ、母方の家族は信仰心厚いカトリックの家系でもあり、その中でも二人の尼僧イーダIdaとマリアMariaはガエリッリアにかなりの影響を与えていたようです³⁾。

彼ラファエツレ・ガエリッリアは、幼少の頃から、ポジリッポという三方を海に囲まれた土地で、よきナポリ人(サレルノ人というべきか)として海をこよなく愛し、子供の頃から伯母イーダの名を冠した船を海に漕ぎ出し、さらにこの近辺に多数あった古代ローマの別荘跡に魅せられていました。ポジリッポの海岸の海、太陽、風景を満喫していました。そして彼はまた、家族の文化的

環境によく適合していました。因みに、父親は、息子が1937年にサレルノ市に寄贈した10000冊に及ぶ蔵書を所有しており、のちにそれがサレルノ県立図書館のグアリッリア財団を建立しました。

15歳になった時に、彼はナポリ大学法学部に入学し、たった19歳の若さで、1908年7月17日に卒業しました。その同じ年に、無数の論文を残しましたが、その最初の論文”Per una storia della mano d'opera straniera” [『外国人労働者の賃金の歴史に関して』] を刊行しました⁴⁾。その当時、外交官職というのはまだ上流階級の、とりわけ貴族階級の専有するものでした。新進の青二才にとって、最初の三年間は無給に近いものがあり、それまでに蓄えた福運や財運をもっていなければ、全うするのも到底無理な職でした。だから、当時「外交官キャリア」には二種類のタイプに分けられていました。その一つは、特権は少ないけれども、年3000リラの支給を求めることのできる立場で、もう一つは真の外交官キャリアで、当初全く収入はないけれども、臨時収入として少なくとも8000リラが年間でてくるという立場でした。グアリッリア自身は、家族に頼ることを潔しとせず、自らの責任のもと前者の立場を選択していました。1909年の18名の外交官職員試験に参加し、筆記試験も口頭試験もトップで通過しました。この経験を、彼は生き生きと率直に、その自伝的論考の中で語っています⁵⁾。

ヴィットーリオ・アルフィエーリ Vittorio Alfieri は、彼のことを以下のように述べています⁶⁾。つまり、強烈なナポリ的色彩の濃い特徴を保持していた、と。この一文から、彼は生まれて以来、カンパーニアの雰囲気が家族の中に蔓延している中で育っていったということが窺い知れますし、その後の外交での経験の中にいい意味で生かされていったと考えるべきでしょう。しかしながら、アルフィエーリは、彼には母親との生活という部分が時間的にも経験的にも欠けていたと続けています。1932年9月8日から1938年2月17日まで在ローマ、ドイツ大使で、そののちナチズムに抵抗する勢力の一翼を担っていたウルリッヒ・フォン・ハッセルUlrich von Hasselは、グアリッリアのことを、「彼は私にいつも真摯で聡明な印象を与えていたが、このような状況の中で外交をどの

ように打開することができようか。驚愕の継承だった」と述べています⁷⁾。いずれにしても、ガエリッリアはナポリ・サレルノの一流貴族のいい資質を受け継ぎながら、立派な経験者の一人であったことには間違いありません⁸⁾。幼少期の生活環境が彼の資質に少なからず生かされていたことは大方認めるところでしょう。

このように、ガエリッリアは何不自由のない、ある程度裕福な家庭で育ち、自らの感性を磨くだけの機会もあり、それを彼自身も存分に活用していたことが伺えます。そして多彩な家族の構成員が彼に多方面から、情操的にも知性的にもいい影響を与えていたことが見て取れます。そのうえに、ナポリを中心とするカンパーニア地方の豊かな自然がマッチしています。彼の天分を生かすだけの自然環境を含めた土地柄が与えた影響を感じざるをえません。

ただ、彼が国家公務員としての活動に入ったときは、まだいわゆるその年齢に達してはいませんでした。当時、彼の年齢は21歳でした。彼はローマで外務省での仕事を始め、初めて海外へ出向いた仕事はパリでした。パリの領事館の職員、すなわち副領事職として、1910年12月31日付けで公職を開始しました⁹⁾。フランスでも叔父の大きな影響力が如何なく見せつけられました。彼がパリに着任した当時の在仏イタリア大使はトンマーゾ・ティットーニ Tommaso Tittoni でした。ガエリッリアが外交畑に入ったときには、ティットーニはすでに外務大臣を歴任していました。そして総領事には、ルッケージ・パッリ Lucchesi Palli家出自の貴族で、ナポリの公爵フェルディナンド Ferdinandoがいました。フェルディナンドの父親はナポリ市に、家族で所蔵していた豊富で古い蔵書を寄贈するという、そんな名門の出身でした。周囲にも知人の類いがいたことは、彼の職責を全うする中で大切なことでした。

それから、9年後の1919年9月20日に、彼は領事の娘フランチェスカ・マリア Francesca Maria と結婚したようです。いわゆる領事職にある青年は、当時最も重要な都市の一つであったパリの日常生活を大いに享受し、彼のようなエリートのもとに構築されてきたイタリア人同僚との友人関係が小さな社会の

中で必要悪的に育まれてきていました。例えば、そのような将来の官僚階級になっていくエリートの中には次のような人物が取り巻いていました。すなわち、ポンペオ・アロイージ Pompeo Aloisi, ガブリエーレ・プレツィオージ Gabriele Preziosi, オッターヴィオ・デ・ペッポ Ottavio De Peppoなどがいました。アロイージは、1932年から1936年にかけてムッソリーニ Mussolini 内閣で外務大臣、東京やアンカラで大使を歴任し、国際連盟のイタリア全権公使を務めていました。また、プレツィオージは、1932年から1936年にかけてウィーン在住全権大使で、ドイツのオーストリア併合の反対論者、そののちブリュッセルやブエノスアイレスで大使を歴任していました。もう一人のデ・ペッポは、1936年から1938年のチアーノ内閣で外務大臣を、アンカラではガリッリアの前任者として大使に着任していました。そんな中に、ガリッリア自身もいました。これからも、当時の外交官僚が貴族出身者に占有されていたことを伺わせます。

さて、副領事としての彼の行動や振る舞いはどんなものだったのでしょうか。それは、非常に形式的で官僚的な領域に限定されたものでしかなかったように思われます。例えば、その仕事は、海外においてイタリア市民が結婚するなどといった場合に限られていました。ともかく、このようにして、彼の外交活動は始まりました。だから、彼自身が夢に描いていたような国家的規模で最終的な交渉を外交に委ねるような場面に、まだ登場するような地位にいるわけではありませんでした。ここで、仕事を投げ出さなかったところに、彼の非凡さというか忍耐強さの一端が見て取れます。

そんな中で、1913年5月には、ロンドンの大使館に栄転しました。ここから彼の外交人生が大きく変わってきます。すなわち、イタリア外交の絵舞台へと登場するようになってきます。そしてガリッリアという家系を揺るぎのないものにしていく礎を築いていきました。そしてイタリア外交といえ、ガリッリアというほどの名声を獲得していくようになってきます。そのうえ、彼の称号に、帝国侯爵が付け加えられました。イタリア外交の中心人物の一人にまで成長していくきっかけになったのが、このロンドンでした。

1913年12月には、彼はロンドンからもう一つの重要な都市サンクト・ペテルスブルグへ移動になりました。それはただ単にのちのロンドン主導であった三国協商としての露仏協商の舞台になっただけではなく、協商に対抗するベルリン主導であった三国同盟の中で彼自身の外交手腕を発揮する舞台でもあったわけです。自ら求めていた外交という舞台の中での活路が見えてきたわけです。この同盟に関して、協商側とも良好な関係を保つことのできたローマの政府は、結局ドイツ、オーストリア・ハンガリーと専守防衛的な同盟を形成する方向に傾いていきました。ガエリツリアは、当時の国際関係の基盤であったヨーロッパの諸政府によって実行されていた均衡関係の政治についてよく情報を持っていたのですが、彼の記憶力のある知識の中で、サンクト・ペテルスブルグへの旅程の途中ウィーンに数日立ち寄り、そこでイタリアの大使と知り合った、と語っています。その大使はナポリ貴族出身の公爵アヴァルナ・ディ・グアルティエーリ Avarna di Gualtieriでした。彼はオーストリア・ハンガリーの友人であり、イタリアがかの国と戦争を引き起こすことに反対でした。ガエリツリアは、このようにして協商側と同盟側との挟間に位置することになりました。

ガエリツリアは、こうした状況を1952年になって次のように記していました。つまり、「今になってたくさんの出来事や私たちのカタストロフィーなどのちに物事を検証しようとすれば、ヨーロッパや私たち自身にとってオーストリア・ハンガリー二重帝国の崩壊が避けられないという旧来の大使がもっていた道理がどうして正しいものだと誰が言えようか。私は、あくまで人間的な物事の動き、その上昇、その発展、その運命的衰退という不可避的な法則、また人間の、その組織の、そしてその制度にそれぞれ縛られていた法則に異議を唱えるのかどうか、そういう道理を与えてなんらかの効力を示そうとは考えないのだが。」と¹⁰⁾。これは後年における彼の述懐を含んでいるのは当然で、そうしたフィルターをはずして見ていく必要があるでしょう。そこには、当時の政局の中、外交分野で彼がどの程度の立場を占めていたのかが大きくかかわってくるように思えます。

だから、ガエリツリアが、古いヨーロッパの衰退、世界の終末そして人類の

歴史の中でおそらく最もドラマティックな時代への移行期を示していた衝突を避けることができなかった外交戦術の失敗による大戦前の最後の穏やかな時代を過ごしたのがロシアだったともいえます。親仏感情、そしてサンクト・ペテルスブルグの環境から影響されたもののうち、グアリツリアはその当時、衝突の責任が単純にドイツにあったと信じていました。しかし、かなり経った後、外交専門家によって叙述された中で、衝突の責任に関して有り余ったあらゆる議論を考察していたことを確言していました。それで、彼は、以下のように述べてきます。「誰も熟慮の結果として戦争を望んでいなかったが、一人一人が政治的衝突をオープンにしたり、耐え忍んで、必ずしも武器に走ることなしに、自らの方に都合のいいように解決できるのを信じるか、少なくとも期待する方向へと確信していた。ヨーロッパにとって、また我々にとって、オーストリア・ハンガリー帝国が崩壊していくことを避けようとする旧態依然とした大使には全く道理がないであろう。人間世界の動き、崩壊論者の増殖、運命的な衰退などの避けがたい法則に反論しないのであれば、それはもういかなる道理をも与えきれないであろうし、私には困難極まりない」と述べています¹¹⁾。彼がこのような考えをもっているということは、イタリアがドイツやオーストリア・ハンガリーの側から参戦するなどとはゆめゆめ考えていなかったのであり、当たり前のようにイタリアが中立を宣言するというのが8月2日だったと熟慮していたはずで、在サンクト・ペテルスブルグのイタリア大使リバルベッラのカルロッチィ Carlotti di Riparbella 侯爵は、イタリアにとって、ロシア、フランスとイギリスとともに参戦する必要性を確信しており、直接彼の考えが念頭にあったとは思えなかったグアリツリアに自らの考えのもとでの行動を伝授していきました。カルロッチィはいずれにしても、ロシア帝国の中で戦時中、特殊な環境を生き抜き、ロシア皇帝ニコライ2世と個人的に知りあう機会を得ることもありました。それは1915年の元旦に、外交団が皇帝への年始挨拶のためツァルスコーの皇宮に赴いた時のことでした。ニコライ2世は外交団一人一人の挨拶にどもりながら挨拶を返すという気が小さく弱々しい印象を与える一方で、右手で左腕の袖口を神経質に引っ張っていました¹²⁾。まさにイタリアと

戦争状態に入るという切迫した状況を確認しており、他の列強との間で孤立化していくロシアを恐れていたように、ガエリッリアは感じ取りました。それで、彼はイタリアに帰国し、1915年3月に満足のいく回答を引き出すことに成功しました。が、ロシア、とりわけ汎スラヴ主義を認識すべく有益なことをする必要性に駆られて、りっぱで中立的な一冊の書籍を翻訳出版することを思い立ちました。それは、ロシアの外交官で王子でもあったグレゴリオ・ツルベツコイの『列強としてのロシア』という書物でした。その序を献呈していました¹³⁾。そこには、イタリアの外交政策の関心と問題が浮き彫りにされていました¹⁴⁾。このように、イギリスやロシアでの外交経験が彼に大きな影響を与えていたことは否めません。

ただ、彼は当時のロシアの軍事情報を見るにつけ、戦争がそんなに簡単ではないことを確信しつつ、ハンガリーに侵入してドナウの大平原へ軍隊を遠征させるだけの余裕がないだろうと踏んでいました。つまり、状況はさほど楽観的ではないにしても、そこまでは至らないと見ていました。しかし、彼はイタリアの戦争介入については、国民主義の開花を見ていた時期の寵児としてのフランスとの友好関係を鑑みても好意的でした。彼はまた、アブルッツォ出身の詩人で、イタリア参戦論の支持者であったダヌンツィオD'Annunzioの議論にも耳を傾けていました。彼はイタリアの仇敵オーストリアとの戦いに群衆を扇動していました。このように巷の声にも耳を傾けながら、彼はローマの外務省の人事部で新たな一步を印していきます。そこで、イタリアの重要な外交官の一人であったシチリア人サルヴァトーレ・コンタリーニSalvatore Contariniのもとで働き、次いで外務省総局長のもとで、イタリア外交政策の根幹を担っていきます。当然のことながら、ここで彼は将来の活動の原資になる形式や思考の重要な部分を学んでいったはずです。カンパーニアで幼少期を過ごしたときの「したたかさ」が見えてきます。彼の持つ性格の中で、この「したたかさ」は、ある意味で外交技術の中で重要な側面を持つものだと思います。とりわけ、第一次世界大戦に至るヨーロッパの情勢の中では、かなり必要なものとして表象されるものなのかもしれません。

イタリアが参戦したのちの5月24日には、7月末まで新たにパリに赴任しています。そこで、大戦以後まで留まり、三人の大使のもとで業務を務めました。その三人は、トンマーゾ・ティットーニ、ジュゼッペ・サルヴァゴ-ラッジ Giuseppe Salvago-Raggi, レリオ・ボニン・ロンガーレ Lelio Bonin Longare でした。このように大使が変わっていったのには、それなりの理由がありましたが、サルヴァゴ-ラッジの場合には、外務大臣シドニー・ソンニーノ Sydney Sonnino との不仲であり、ティットーニの場合には、同盟国側との問題が表面してきたことにありました。そして終戦時には、ガリツリアは和平会議におけるイタリア代表団の一人として参加したかったようです¹⁵⁾。しかしながら、その彼の意図に反して、ブリュッセルへ転任させられました。そこで、彼は「イタリアの」という称号のない立場で、再びローマで外務省によって承認されるまでの1919年11月まで留まっていました。この外務省の決定は、のちに記されているように、彼の経歴の中では最初の後退を示していました¹⁶⁾。

このように、彼はこの最初の外交経験の中で、自らがカンパーニアで育んできた性格を本能的に発揮し、以後の活躍の基盤を形成していきました。さまざまな面に、「したたかさ」を発揮していくようになります。

2. 外務大臣の植民地問題の専門家として、1922年から1926年にかけて

ガリツリアは、自著『回想録 Ricordi』の簡単な緒言の中で、ただ1922年からのみ、「自らの活動が国家のための最大利益の疑問にまで展開していた」と述べていました¹⁷⁾。実際、その年に、二つの重要な国際会議でトルコ問題の専門家として参加していました。一つ目の会議は、3月に、トルコのヨーロッパ側の境界に関する論議の中で、パリで同盟国外相の一人として参加しており、二つ目は、11月に、トルコとの和平のためのローザンヌ会議の技術使節として参加していました。ガリツリアが初めて特別な脚光を浴びたときでもありました。イタリアの新外務大臣カルロ・シャンツェル Carlo Schanzer をして、その問題の暗部に切り込ませ、イタリアの国益のためになるように考えた国境策定を印しました。そしてこの国境線は続く会議で採用されるはずでした。ガ

リッリアはそのシャンツェルに随行してロンドンに赴き、植地的な妥協案としてソマリアのジュバランドのイタリアへの譲渡に関する議論を行ないました。すなわち、会議のブレンとしての活躍でした¹⁸⁾。

さて、1922年10月28日、いわゆる「ローマ進軍」ののち、ムッソリーニは内閣首班に指名されました。この人物、悲劇的な結末に関して、ガエリッリアは、その行動の原点としてイタリアの歴史が敵対的なものではなかったということを示さなければなりません。彼はイデオロギーの側面から、対外諸国への技術顧問、奉仕者と見做されていました。そのためか、自らの地位に常時留まるはずでした。それで、彼は熱烈に、穏健な政策主導、とりわけ彼にとっては恩師コンタリーニの行動の結実でもあったイギリスとの連携とエチオピア征服とを結びつけていたムッソリーニの主導権に協同していきました。しかしながら、ムッソリーニの主導権が不信感を伴うようになったとき、最小限の損害に留めようと画策していたはず。このような考えの中に、ヒトラーのドイツに想像以上に近づき、第二次世界大戦勃発後にフランスやイギリスに対する戦いに入っていたムッソリーニの目標を考察しているものでした。回想に記している以上にイタリアを参戦の方向にもたらしてしまって、ガエリッリアにとってはイタリア共和国の責務をファシズムに仕えることで不可能にしてしまったことを示唆しています。たとえファシズムが二重政策を実行していたとしても。

すなわち、回想には以下のように記しています。「実際、私は忠実にファシズムに仕えた。あるいはもっと言えば、ファシズム体制での外交政策は、それはイタリア国民の大多数の意志で形成されていたのだが、その政策の方向性を探りながら、それが私の行動範囲の中にあっただとしても、イタリアの国益以上に単純な防衛的な効力を求める方向だけであった。この唯一の方向性を目標にしながら、実際にはファシズムへの『不義』に導いていくものは何も持たなかった。それどころか、パリ駐在大使に指名されるまで、つまり1938年末まで、ムッソリーニの政策に情熱とともに従順さを持たずに仕えていたことに対する自己啓発を受け入れていた。その政策はイタリアの国益を推進すべく適切だと

思えなかった方法をヨーロッパの大問題の中に挿入させていくことを望んでいた。しかし、それはそれぞれどこか最終的にその枠組みの中に組み込んでいくことを自覚していた。私は沈黙考していた。イタリアの崩壊を避けるべく、私は、1940年6月に至るまで考えられうるあらゆる結果を想定して、フランスでできることをしてきた。私自身の考えを当時の外務大臣に対して書面にしたり、話したりしてきた。一度修復できない状況に陥ってしまったときに、国家に対する私の労力を否定しなければならないとは思えなかった。そのうえ、私の立場がそうすることを許すものだったので、その労力を惜しむよりもその立場にとどまって意見を述べることを優先した。我が国が沈没しかかっているときに、政治状況が許す方法や制度で公式に発言することを躊躇していた。私は自身が唯一それをなすことのできる国家の上級職員であったと信じている。だから、ファシズム体制の中で二重政策をとったことに自責の念を感じていた。それで逆に…」とあります¹⁹⁾。ここに、彼の悔悟の念だけでなく、自らそれを阻止できる立場にありながらも、煮え切ることができなかったことを回想しています。すなわち、当時のヨーロッパの政治状況の中で、完全に翻弄されていたことを示しています。ここに彼の非凡さとともに、彼をもってしても、ファシズムの力に押し切られた自分の力の不甲斐なさを表明しています。彼の非凡さを打ち消してしまうほどの、如何ともしがたいヨーロッパの状況が迫っていたことを回想しています。

そのあとに、以下のように続けています。「私の意見は少数意見の一つであったことを公表しておく。国王が私を別の責務を成し遂げるように召喚することのなかった間、それは続いた。その意見とは、君主体制を救済しようとしたものではなかったが、君主制の下でのイタリアを救済しようとするものだった。すなわち、イタリアにとって必要不可欠なものだと考えに考え抜いていた」と続けています¹⁹⁾。

ムッソリーニとの最初の出会いは、実際、他者に生命力の凄さを与えようとしてのものだが、全く中身のないものだったので、すなわち彼は劇場的な方法で登場してきたので、かなり周章狼狽気味なものでした。また、新政府の最初

の行動は、具体的なものがガエリッリアのように足下にある外交官を恐れさせるというイメージに満足しているという具合でした。事実、ムッソリーニは、ローザンヌ会議の開会に赴き、新たなファシスト・イタリアの特権を示すために、首相兼外相だったフランスのポアンカレなどの使節団との準備的な交渉を口実にしていました。そうした会談²⁰⁾の終りに、ムッソリーニは、同盟国側がイタリアとの完全な同等性を基盤にしてローザンヌ会議の諸々の疑問を取り扱わせるようにしたジャーナリズムに情報を提供していた²¹⁾のですが、ガエリッリアが周知していたように、具体的な見解からこの同等性が全く意味のないものであったことを理解していました。この会談にしろ、1923年7月24日の和平協定締結で終了していたローザンヌ会議のさまざまな作業にしろ、そこに参加していました。12カ国のうちにイタリアの所領維持に光を当てていたことは事実です。つまり、東方問題に関するロンドンでの諸国会議にも参加していました。ローザンヌで、ガエリッリアはコントラーニの役割に関しても、ロシアのヴォロフスキー代表との接触を維持していました。ヴォロフスキーはロシアが会議でイタリアの代表団を支援していましたが、フランスやイギリスに対峙する立場を否定するものでもありました²²⁾。

この年における、ムッソリーニの唯一の一撃は、ギリシアのコルフ島の占領でした。それはアルバニアとギリシアとの国境を策定する責務を負ったイタリア使節団がギリシアの叛乱軍に殺害されたことに端を発していました。ムッソリーニは即座に多数のギリシア人を殺害するほどの爆撃をし、このイオニア海の島を占領させました。この行動は、常にギリシアの「守護者」であったイギリスとの最重要な関係に軋轢を生じさせることになりました。それで、ムッソリーニは、コルフ島からイタリア軍を撤退させる代わりに、アテネ政府が謝罪をして、五千万リラの賠償を支払うという条件を示した国家社会会議の解決策を受け入れました。ガエリッリアは、常にコントラーニの信頼を享受していましたが、コルフ危機のために、わざわざ創設された特務局長に就任し、ムッソリーニを穩健に行動させるように務めました。続いて、第五課の局長に指名されました。その課は外交政策の一般的な方向性を与えた植民地問題に関する事

項を扱い、タンジール問題に関わり、とりわけイタリアとイギリスの間での植民地問題に拘わらざるをえませんでした。そして1924年5月のソマリアのジブチ譲渡に関して伊英会議の条項策定のためのイタリア代表を務め、その翌年リビアにおけるイタリア植民地獲得の主役をも務めました。それは、1925年10月23日から12月14日にかけてカイロで開催された、国境策定のイタリア・エジプト会議で決定されました。そのとき、ガリツリアはイタリアの第二代表として、第一代表のラツァーロ・ネグレット・カンビアーゾLazzaro Negretto Cambiaso侯爵とともに出席していました。実際、「砂漠の収集」の拡大²³⁾は、すでにイタリアに配置されていましたが、自国の渴望を満足させるには時間がかかったことも事実でした。いずれにしても、ガリツリアはファシストの行動中、奥深くに足を踏み入れてしまっていました。彼の能力もさることながら、それ以上に時代の動向に翻弄されていたことが見えてきます。彼はある意味で、時代の流れを読み取りつつも、その中で翻弄されざるをえない状況に置かれていたのも事実でしょう。

ともかく、ガリツリアはほぼ同時代的に、その一翼を担っていなかったにもかかわらず、コントラーニの偉大な業績を考えることを自らの満足に同調させていたことを記録しています。イタリアがイギリスとともにフランス、ベルギーとドイツとの間の国境を策定するロカルノ条約に参加するようにムツリーニを説得しました。ムツリーニは、ドイツの修正論者からフランスとベルギーの国境を策定することの危険を感じ取っていたので、当初は反対していました。それで、国境を実質的に開放し、とりわけドイツ中部の国境をそのまま残しておくというものでした。すなわち、ベルリン政府にとってはオーストリアを合併する可能性、いわゆる併合Anschlußの可能性を残しておくためのものでした。しかしながら、孤立化させない必然性と独仏国境を保障する特権は、イギリスの同調のもと、1925年10月16日になって、やっと調印されました。いずれにしても、ロカルノ条約に忠実であり、その7年後にガリツリアは次のように記しています。「イギリスの影はフランスにしるドイツにしる、あるいは当時の世論にしる、それに直面することを我々に保障しなければならなかつ

た。要するに、フランスとの関係の中で、チェコスロヴァキアとかルーマニアが入ってくることもある。しかし、それはただ何らかの厳しさを減退させることであり、何らかの主導権を断念することであり、何らかの妥協的な解決案を模索することであり、ロカルノ条約の真の精神を最善の方法で適用することであった。すなわち、au dessous de la [騒乱を乗り越えて]、それはイギリスの側に我々を置くことに他ならなかった」と述べています²⁴⁾。

3. 穏健ファシストと外交、1926年から1932年にかけて

1925年5月15日にムッソリーニがディーノ・グランディDino Grandiを外相の補佐官に任命する一方で、彼はまだ当時30代の穏健なファシスト党员であったのだが、王政に忠実な自由主義体制者と比べても、ファシスト体制の継続性と暫定性の支持者として知られていました。内相の地位から補佐官に配置転換されていました。ムッソリーニの選択は、内政から政敵を遠ざけること、外交の抜本的な同僚としていわゆる「初期」のファシスト党员を確保する必要性や内閣の「ファシスト化」を主導することでした。ディーノ・グランディは、ゲアリッリアのほぼ同年代の人物で、穏健外交政策に少なからず貢献していた貴重な同僚で、助言者だったはずなのですが、ファシズムから逃れていた外交官の中でも最も才能に恵まれていた人物だとされています。グランディやゲアリッリアの他の同僚の中には、アウグスト・ロッソAugusto Rosso伯爵がいました。

1929年から1933年にかけてアメリカの國務長官ヘンリー・スティムソンHenry L. Stimsonは、ルーズヴェルトのもとで戦時の長官を務め、「ムッソリーニは交替させるまで大目に見られていた勇敢で知性あふれた外務大臣の補佐を受けていた。スティムソンがヨーロッパで関わった如何なる大臣も、ディーノ・グランディのように大陸の最重要問題について明確な観点を持った者はいなかった」と述べています²⁵⁾。また、イギリスの外交官ハロルド・ニコルソンHarold Nicholson卿は、イタリア外交の批判者として名を馳せていましたが、以下のように叙述しています。「しかしながら、近代イタリアはスフォルツァ

とかグランディのような外交官を産出していた。彼らは一般的な系統を正当に引き継いでいた」とあります²⁶⁾。

グランディの昇進は、1926年3月に彼がその3年後に外務大臣に指名されるや、辞職に追い込まれたコントラーニの影響を必然的に追いやってしまう方向に傾倒していきました。グランディは、コントラーニとは違った意味で、当時のイタリアが置かれた立場を、よく理解していた人物だったと言えるでしょう。

その若い新たな補佐官と外交官との間の仕事の取り決めは良好なもので、それは1926年12月12日にグランディがガリッリアを指名したことにも現われていました。ガリッリア自身はすでに1924年以来、外交政策総局長であり、その後ヨーロッパとレヴァンテの公私とも商業政策の理事長を務めていました。最初、新外務大臣は彼にファシスト党に登録するさいにどんな条件が必要なのかを訊ねていました。それに対して、ガリッリアは、思想的に敵対するためではなく、国家機能がどの政党にも属さないという考えのもとで、ファシスト党に登録することを拒んでいました。いずれにしても、彼は指名を受け、数ヶ月のちに、全ての外交官がファシスト党に登録しなければならなくなったときに、自動的に登録せざるをえなくなりました。回想録の中で認めているように、ファシスト党がその当時に実行していた政策と妥協しながら、何ら反論することもありませんでした²⁷⁾。

グランディにとって、ガリッリアは、「私の右腕は、7年間にわたってキジ宮殿[政府]で補佐官として、外務大臣として支えてきた。外交官としては、教養があり、能力を備え、交渉人としては、慎重で、外交的に信頼が置ける勇敢な愛国者であった」と断じています²⁸⁾。まさに、両雄、相手を熟知するという関係ではなかったのでしょうか。それを、ガリッリアは、以下のように述べています。すなわち、ガリッリアにとって、「外務省の旧態依然とした体制の中であってグランディとの結びつきは、実際ファシズムよりも関心のある人間的な現象の一つだった。グランディにはキジ宮殿の秘匿性の中に入り込み、さらにそのうえに大衆、とりわけファシスト党の人々にとって不可解なままであった若干の出来事を納得させるのに、数週間で十分であった。明らかに共通

の知性とか野心のないものを授けられていた」と述懐しています²⁹⁾。

政策総局長として、ガエリッリアはヨーロッパ中の大使館から到着するあらゆる文書を検討し、それを関係各局に伝え、各大臣と各地にいる外交関係者との間の共同作業を展開し、折衝していました。そのうえ、しばしば党幹部に書面を配布したり、あるいはグランディが署名する報告書の作成をしていました³⁰⁾。

ガエリッリアが対処していた基本的な問題は、常に植民地問題であり、あるいはもっと正確に言えば、イタリアがどのように自らの植民地支配を伸張させることができるのか、でした。実際、重要な植民地の所有は、列強の中に身を置くためにはどうしても避けて通ることのできない要件だと考えており、イタリアの国民総生産にとって重要な捌け口になると理解していました。だから、彼はそれがヨーロッパ列強の協力のもとで承認され、とりわけイギリス、強いてはフランスとの了解を受け入れて、成立しなければならないという明確な方針を抱いていました。もしイタリアがフランスとの間に大きな亀裂を生じれば、イタリア統一以後のイタリアの対外政策の基本的な方向性が常にそこに存在していたという考えに反論できなくなることを、彼はよく理解していました。そして「イギリスには絶対に敵対しない」³¹⁾ という持論をもっていました。彼は回想録の中で、1925年の夏コントラーニとともに、エリトリアの総督ヤーコポ・ガスパリーニ Iacopo Gasparini に、「東アフリカにおける我々の植民地の出来事が大英帝国と我が国のさまざまな面での協同によってのみ我が国の安全保障が可能になる。もしイタリアにとってヨーロッパの状況との調和の中で、そして不利な衝動なしにこのような政策を維持することができるならば、これは我が国の植民地政策に効果的な援助をもたらすことのできる潜在的な力だった。ヨーロッパと同様に、アフリカにおいてイタリアにとっては反論的な行動に懐疑的になることなく、イギリスの政策の向こう側で、我々の態度が完全に受け身にならざるをえない、またイギリスの意図に無抵抗であるということを示唆しているのではない。不動の知性あふれるイタリアの意志が、イギリス政府との全く困難な状況に直面しながらも、真摯な結論に到達できるはずである

と私は常に考えていた。部分的にはイギリスの基本的な国益を遵守していくことが必要だった」と認めていました³²⁾。ここに、彼のイギリスに対するイタリアの対処法が見て取れます。彼の考えの根底に、これが根づいていたことは疑う余地もありません。

その年の12月に、英仏伊の間で1906年に実施された協定に予測されていた譲渡、つまりエチオピアでの共同行動にとって、イタリアとイギリスとの間で交わされた協定を、往復書簡が批准していました。イタリアは、タナ湖周辺地域でイギリスが経済的利益を優越していたことを認識しており、アビシニア政府を通じて、それを支持することを約束していました。いずれにしても、イギリスの要求は、供給物資の通路に当たる回廊の確保はもちろんとし、湖近辺の封鎖の払い下げに関するものでした。その代わりに、イギリス政府は、イタリアの要求、すなわちエリトリアとソマリアを結ぶ鉄道の確保、東アビシニアにおけるイタリアの経済的な影響力を支持するというものでした³³⁾。このような植民地問題は、彼にとってかなり重要な位置を占めていました。1928年に、彼は穏健な植民地譲渡の代わりに、ムッソリーニに対してフランスとの協定に異議を唱える人々の中にいました。

英仏の豊かな植民地帝国の意義深い取り分を平和裡に獲得することができないと見做していたので、彼はエチオピア問題の定義の中にその解決策を見出していました。1896年3月1日にアドゥアの敗北で生じた災いでクリスピ Crispi 政権下のイタリアに熱望されていた領土に関して、イタリアの保護領の獲得、少なくともそのような体制を望んでいました。

概括的には、ガリツリアは確かに、イタリアの政治的な伝統を、その勢力の軽重でバランス・シートを傾けさせる能力のある二つの反対勢力での勢力均衡に求めています。この政策は、1929年9月12日以降外務大臣の要職にあったグランディによって、ファシズム拡大会議における重要な議論の中で、フランスとドイツによって代表される二大均衡勢力によって決定される重要事項として、公表されていました。グランディにとって、「我々はまだヨーロッパの中で主役ではない。しかし、主役たちは我が国なくして何もすることはできな

い。イタリアはそこで求められ、国家の軍備力が整った日に、勝敗を決定づける勢力になるであろう。イタリアの政策は、決定的な勢力になることを重要視する政策である」との思いがあったようです³⁴。これはある意味で、ヨーロッパにおけるイタリアの採るべき道として重要な考えが見えてきます。あるいはその二ヶ月後にムッソリーニが次のように叙述しています。すなわち、「イタリアはフランスとドイツとの間で『決定的な影響力』と呼ばれることを望む勢力を構成する以上に、常々近づいていく。それぞれの側からかなり高く支払わせる時期に賭けている。フランスとの対照は、ドイツに対する場合を阻止しえない。ドイツとの例外的な対照は、フランスに対する場合を阻止しえない。我々の政策が三国の方策の奴隷ではないことを示すこと。それでその後を見ていこう」と³⁵。

ドイツに直面して、ゲアリッリアは実際、その考えにかなりの差異をもっており、イタリアの国益にとってドイツがいつも脅威であったと見做していました。そして、ヴェルサイユ条約の改正論がイタリアに対しても展開されることを恐れていました。1930年6月25日にグランディに宛てた書簡のように、イタリアにとって、服属の危険なくして、そしてアルト・アデージェ問題やトリエステを含んだアドリア海におけるドイツ世界の圧力によって代表される摩擦点を伴って、ドイツの再編成体制に参加することは難しいものでした³⁶。それはゲアリッリアにとっては、「唯一重大な危機が、永遠のものではないとしても、我が国の出来事、すなわち併合Anschlußに脅威を与えている」ものでした。すなわち、ドイツへのオーストリアの連携を意味していました³⁷。ワイマール共和国時代の重要な外相で、フランスとの和平交渉の成果で1926年にノーベル平和賞を受賞したグスタフ・シュトレゼマンGustav Stresemannに対峙するまで、警戒心を抱いていましたし、それを解き放つことはありませんでした。シュトレゼマンについて、ゲアリッリアは、「ドイツ経済の驚異的な再構成は、そしてその国のあらゆる社会的勢力の段階的再生は、人口増加が多少とも長期的な衰微の中で、世界におけるドイツの潜在力を復興する宿命づけられた軍備を驚異的に助長していたことによっている。その結果、このような

準備は戦闘手段の組織化によって建設されていっただけではなく、ドイツそのものの精神構造や経済的物質的資源の合理的な増加によっていた。こうした全てのことは、ドイツの国益の中で、平和主義や自由主義によって束ねられていたし、そうあったに違いなかった。それがドイツの似非慎重さ、ドイツ・マルクのインフレーションが示していたような似非経済、ドイツがヴェルサイユ条約に世界的な自由主義や平和主義の複合性をもたらしていた小さな勝利を日々示していたような似非政策で当時を代表していた人物であるシュトレーゼマンの微笑で覆い隠されていた」と喝破していました³⁸⁾。

ガリツリアは、ドイツ・オーストリアの連合によってイタリアに与えられる脅威をはっきりとさせたと考えていました³⁹⁾。1931年3月に独逸関税同盟の企てがあったとき、イタリアがそれに対置され、独逸併合の第一歩になるので、グランディとともにそれに対処していました。この独逸の驚きの行動はイタリア外務省をして、イタリアが慎重に行動するにしても、フランスとドイツとの間で等距離外交を推し進めることができないことを確信しましたが、当然かなりの代償を獲得しようとしながら、いずれを第一に考えるのかを選択しなければなりません。オーストリアとハンガリーの再統合に好意的である必要性を説明すること、併合を避け、ドナウ・バルカン地域の安定を再構成するべくハプスブルク家を再登場させることについて、ガリツリアはグランディが非公式にオーストリアとハンガリーとの統合という考えに進んでいったことを容認していました。その考えは署名はされていませんでしたが、4月25日と5月3日付けのトリブーナ紙La Tribuna上に掲載されていました⁴⁰⁾。いずれにしても、ハプスブルク家再登壇の流れは熟していました。

ヒトラーのナチスの動きに直面して、ガリツリアは、ヒトラーがムッソリーニのローマ行軍の成功以後、彼のもっとも忠実な弟子で賛美者であると宣言し、彼との会談を安易に求めていたにもかかわらず、重大な危機を看破するのに何の躊躇もありませんでした。しかし、ヒトラーは何人かのイタリア人と接触することができました。そのうちの二人には絶大な信頼を寄せていました。その一人が陸軍少佐ジュゼッペ・レンツェッティ Giuseppe Renzettiで、イタ

リア外交から疎んじられていたにもかかわらず、ベルリンで比較的行動的だったファシスト党员でした。もう一人はダンツィヒで国際連盟代表だったマンフレディ・グラヴィーナManfredi Gravinaでした。ゲアリッリアは、ヨーロッパにおけるドイツの支配に関するヒトラーの計画が彼のあらゆる約束にもかかわらず、イタリアにとっては致命的であったことをよく説明していました。おそらくドイツの政策専門家の中でも唯一の人物が南チロル、すなわち第一次世界大戦後にイタリアに併合されていたアルト・アディージェの領土でドイツ世界が辞退せざるをえなかったことを宣言していたという事実がありました。その地にはドイツ語を話す住民が230000人ほどいたにもかかわらず。その住民たちの運命は、ファシズムによって適用された奪民族性的の方法をも考慮して取り沙汰されていたドイツ国内での胸騒ぎとともに見守られていました⁴¹⁾。1927年12月に、イタリア大使アンティノリAntinoriとナチズムのトップとの間で新聞用の対談がありました。ヒトラーは、その当時、小さな行動グループの長として、シュトレゼマンに対する政策のため、そしてフランス、チェコスロヴァキアやオーストリアに対するドイツとイタリアの同盟のため、支持を求めています。ゲアリッリアはそのことを皮肉をこめて文書の余白に次のように記しています。「ヒトラーには道理がある。しかし、ドイツの手口（併合、ボヘミア、アルザス・ロートリンゲン）に加担しなければならない理由を理解していない。確かに、アルト・アディージェの問題はそのとき、些細な問題になった」と述べています⁴²⁾。

1930年9月の選挙に、すなわちヒトラーがベルリン行軍とともに望んでいた権力を獲得するであろうと宣言したとき、彼とグラヴィーナとの会合を解釈する中で、同じように明白にしていました。ひとたび政府に到達して、フランスとの国境、イタリアとの国境を再認識したときに、植民地問題に関する復讐を解消し、バルト諸国への拡大の中でドイツの過剰人口を解決しようとしてしました。ゲアリッリアは、ヒトラーの感嘆符的表現や疑問符的表現つきの肯定意見を意義深く充填していました⁴³⁾。ヒトラーは重々しく、あたかもオーストリアがもはや存在せず、併合が既定の路線であるかのように、イタリアとドイツとの間

で共通の国境について話していました。そのヒトラーに関して、ガリツリアは何ら証拠を提示することなしに、ヒトラーにイタリアが財政支援を与えていたことを確言していたという記憶の中で数少ない間違いを犯していました。それに反して、歴史探究の成果は、ヒトラーが『わが闘争Mein Kampf』のイタリア語版の印税を受け取っていたことのみを示していました⁴⁴⁾。1931年10月になると、外務官僚がベルリン訪問の際にグランディに同行していました。すなわち、イタリア外相のこの最初の訪問は、反戦によるものでした。それは、ある意味において、1930年9月の選挙で大成果をあげたのち、権力闘争の厳しい闘いの最中にあったヒトラーと会談を拒否するとともに、ワイマール共和国の民主的な閣僚であったハインリヒ・ブリュニングHeirich Brüningと会談することを条件にベルリンまでやってきていました。

実際問題、ガリツリアは周知のように、国粹主義的な立場に近かったけれども、イタリアに課せられていた植民地問題の解決のために、フランスとの妥協案を基本的に考えており、この妥協でイタリアが大きな成果に行きつかなければならないと考えていました⁴⁵⁾。

エチオピアがまだ植民地化されていない唯一のアフリカ領土だとして、イタリアの植民地拡大政策にとって理想的な領土であったことを定め、フランスとイギリスの承認を獲得するべく働く必要がありました。ガリツリアにとって、「確かにアビシニアはイタリアに開放されていた人口統計学的、経済的な解決策をもっていた」と示唆しています⁴⁶⁾。そして1930年から1931年にかけて、当時の植民地相であったエミリオ・デ・ボーノEmilio De Bonoとガリツリアは何度も会談を行いました⁴⁷⁾。そしてロンドンの大使として派遣されたグランディの解雇に繋がった1932年7月20日に、ムッソリーニによって政界再編成とともに、イタリアの対外政策の中でガリツリアの立場が微妙なものになっていきました。この「再編」、あるいは当時として保守的な傾向性をもつ政界へと変化していったことは、イタリアを孤立化させていったローザンヌ会議での英仏協定に、国際連盟や民主主義の政策へのグランディの過度の傾倒に対する反応として正当化されていきました。実際には、内政の変化を物語るものと

して捉えられています。つまり、内政と外交とのバランスが巧みに維持されていたことがヨーロッパでのイタリアの立場を良好にしていたポイントだったのですが、そこがムッソリーニの台頭によって脆くも崩れていったことを示しているに他なりません。そのバランスを巧みに利用していた基盤の部分が崩れたわけですから、最悪のシナリオへと進んでいかざるをえなくなったとも言えます。これは単に政治家や外交官の力量だけではなく、その当時の状況をよくよく理解しても、そのように変化していくという大きな歴史的な流れが左右していたことはよく見ておく必要があります。それはまさしく、グランディの昇進に限界を示すものであり、外務大臣のポストを自らのもとに直接置いたムッソリーニの権力を再度確認するものでした。その時になっても、グランディはエチオピアにおけるイタリアの「自由裁量」との引き換えに、同盟国側に向かおうとしていたのですが、フランスとの関係はかなり微妙な状態になっていきました。それで、ムッソリーニは、フランスの内政状況の中で改革運動を待望し、ヒトラーが権力掌握に動いていると予想していたドイツにおける動きを待望していました。そんなとき、すなわち1932年8月31日付で、ゲアリツリアは駐マドリード大使に任命されました。これはエチオピアにおけるイタリアの主導権を失わないようにされたものだと報告されていました。そのことが同年8月26日に、次のように書き記されています。「現状の中で、すなわち将来への精緻な目的なしに違いの多い友好関係という政策の中で、イタリアの増加人口で構築される地方にイタリアの伝統的な手法の鼓舞だけではなく、紅海におけるイタリア植民地の状況を不安定な状態に置かざるをえなくなったはずである」と⁴⁸⁾。

註

- 1) Guariglia,R., Scritti <Storico-eruditi> e Documenti Diplomatici (1936-1940), Napoli. 1981, pag.IXに書かれたMoscati,R.の緒言を見よ。そこには," dalla costiera amalfitana lungo lo scorcio del '600 e i primi cinquant' anni dell' 800 i velieri

- dei Guariglia con i loro carichi soprattutto di legname, ma anche di granaglie, di olio e di vino, avevano avuto, insieme con i battelli dei De Cesare, un ruolo determinante nel commercio maritime-mercantile del mezzogiorno” とある。
- 2) Cf. Moscati, R., ed., Guariglia, R., Primi Passi in diplomazia e rapporti dall'ambasciata di Madrid 1932-1934, Napoli, 1972, pag.7; Guariglia, A., Famiglia Guariglia ed affini. Notizie varie di S. Mauro Cilento e Raito, antiche sede dei Guariglia, Napoli, 1932.
 - 3) Scarano, F., Raffaele Guariglia, l'uomo e il diplomatico al servizio dello stato, Salerno, n.d., pag.22.
 - 4) その後、Rivista d'Italiaという雑誌に掲載される。その中で、1922年までの自らの生涯を自伝的に回想している。自らはリヴォルノの海軍士官学校に入学しなかったという夢を持っていたことを追想している。そして数学の不出来が、外交官への道を歩んでほしいと願う父親のアドバイスを受けて、それを断念することになった経緯を述べている。
 - 5) Moscati, R., ed., Guariglia, op.cit., pag.5 : Il mio aspetto era ancora fanciullesco, mentre fra i miei compagni ce n'erano due che erano già stati Sindaci di due piccolo paesi e mi ispiravano un profondo rispetto. Come al solito, allora come ora, era d'uso farsi raccomandare. Il mio pezzo forte era un benedettino, Don Peppino Acernese, che aveva ottenuto da mio zio Emanuele Gianturco, quando questi era Ministro della Pubblica Istruzione, amorevoli e generosi aiuti per il restauro della Basilica di San Paolo [...]. Don Peppino, dunque, per gratitudine verso mio zio, si fece in Quattro presso i miei esaminatori; gli scritti erano andati bene, il terreno era favorevolmente preparato, il Presidente era sordo, la mia stessa giovinezza predisponeva all'indulgenza.” Cf. Scarano, op.cit., pag.22.
 - 6) Alfieri, V., Due dittatori di fronte, Milano, 1949, pag.353.
 - 7) von Hassell, U., Die Hassell-Tagebücher 1938-1944. Aufzeichnungen vom Andern Deutschland, Goldmann, 1991, S.429; I.T., Diario segreto 1938-1944. L'opposizione tedesca a Hitler, Roma, 1996, pag.331.
 - 8) Scarano, op.cit., pag.19.
 - 9) 彼の外務省入省以後の経歴については、ASMAEの個人データに、そして1915年までの履歴については、La formazione della Diplomazia nazionale (1861-1915), Repertorio bio-bibliografico dei funzionari del Ministero degli Affari Esteri, a cura di Fabio Grassi Orsini, Roma, 1987, pag.382.
 - 10) Ibid., pp.28-9.

- 11) Ibid., pag.38.
- 12) Scarano, op.cit., pag.23.
- 13) Grassi Orsini, ed., op.cit., pag.46 [Prefazione di Raffaele Guariglia a Gregorio Trubezkoi, *La Russia come Grande Potenza*, Milano, 1915, pag.11] : Nessuna delle grandi guerre finora combattute ha stabilito un assetto politico definitivo e nemmeno la presente, per quanto accenta e vasta, potrà stabilirlo.
- 14) Ibid., pag.III: Germanesimo e slavismo sono le due grandi correnti con le quali l'Italia si trova ora più che mai a contatto: l'una già tenta di straripare, dell'altra la piena non appare ancora vicina, ma ambedue tendono a quelle vie mediterranee che è nostro sommo, primordiale interesse tenere libere.
- 15) Scarano, op. cit., pag.24.
- 16) Cf. Micheletta, L., *Italia e Gran Bretagna nel primo dopoguerra*, vol.1, Roma, 1999, pag.336.
- 17) Guariglia, *Ricordi...*, cit., pag.5.
- 18) Scarano, op.cit., pag.29.
- 19) Guariglia, op.cit., pagg.756-7.
- 20) Appunti personali del comm. Guariglia relativi alle conversazioni di Territet, Territet, 19/11/1922, DDI, serie VII, 1922-1935, I, 31/10/1922-26/4/1923, D.136.
- 21) Comunicato sull'incontro di Territet in Mussolini a Vittorio Emanuele III, Losanna, 20/11/1922, DDI, serie VII, 1922-1935, I, 31/10/1922-26/4/1923, D.138.
- 22) Scarano, op.cit., pag.30.
- 23) 『砂漠の戦場, エル・アラメイン』という映画にその一端が浮き彫りにされている。
- 24) Guariglia, op.cit., pag.163. Cf.Scarano, op.cit., pag.30.
- 25) Stimson,H.L. & Bundy,M., *On Active Service in Peace and War*, New York, 1948, p.268; Grandi,D., *Il mio Paese. Ricordi autobiografici*, Bologna, 1985, pag.317.
- 26) Nicholson,H., *Storia della diplomazia*, I.T., Milano, 1967, pag.162.
- 27) Guariglia, op.cit., pag.53. Cf. Grassi Orsini,F., “La diplomazia fascista” , *Working Papers del Dipartimento di Scienze Storiche, Giuridiche, Politiche e Sociali dell'Università di Siena*, 1992, pagg.17-18.
- 28) Grandi, op.cit., pag.654.
- 29) Guariglia, op.cit., pag.45.
- 30) 例えば, ASMAE, *Affari Politici Germania 1919-1930*, b.1137, 1927に見られるベルリン大使館の文書などに表現されている。
- 31) Scarano, op.cit., pag.32.そこで, スカラローは “mai contro l'Inghilterra” と表現

している。

- 32) Guariglia, op.cit., pag.45.
- 33) Cf. Mussolini al ministro ad Addis Abeba Colli di Felizzano, Roma, 21/12/1925, DDI, serie VII, IV, d.208.
- 34) De Felice, R., "Alcune osservazioni sulla politica estera mussoliniana", id., ed., L'Italia fra tedeschi e alleati, Bologna, 1973, pag.64.
- 35) Ibid., pag.65.
- 36) Ibid., pag.120.
- 37) De Felice, op.cit., pag.400: Guariglia a Grandi, Roma, luglio 1931.
- 38) Ibid., pag.84.
- 39) Scarano, op.cit., pag.33.
- 40) Cf. Scarano, Mussolini e la Repubblica di Weimar, Le relazioni diplomatiche fra Italia e Germania dal 1927 al 1933, Napoli, 1996, pagg.266-268.
- 41) Scarano, Raffaele Guariglia, l'uomo e il diplomatico al servizio dello stato, Salerno, n.d., pag.33.
- 42) Aldrovandi (ambasciatore in Germania) a Mussolini, Berlino, 12/12/1927, DDI, serie VII, D.680.
- 43) Rapporto di Guariglia a Grandi, Ginerva, 12/9/1930, DDI, serie VII, IX, D.246.
- 44) Scarano, Mussolini e la Repubblica di Weimar, Le relazioni diplomatiche fra Italia e Germania dal 1927 al 1933, Napoli, 1996, pagg.188-191.
- 45) Scarano, Raffaele Guariglia, l'uomo e il diplomatico al servizio dello stato, Salerno, n.d., pag.34.
- 46) Guariglia a Grandi, Roma, luglio 1931, De Felice, op.cit., pag.400.
- 47) Cf. Appunti delle riunioni tenutesi nel gabinetto di S.E. il ministro delle Colonie, in ASMAE, Affari Politici Etiopia 1931-1945, b.22.
- 48) "Relazione di Guariglia per il Ministro degli Esteri, Roma, 26 agosto 1932", ASMAE, Affari Politici Etiopia 1931-1945, b.6. Lefebvre d'Ovidio, F., L'Intesa italo-francese del 1935 nella politica estera di Mussolini, Roma, 1984, pag.303には、È stato anche affermato che senza l'allontanamento di Grandi e del suo gruppo di lavoro gli accordi tra Italia e Francia del gennaio 1935 sarebbero stati raggiunti con due anni di anticipo.とある。

(続く)